

「キリストの弟子の条件と約束」

②なぜつまずくのか

ルカ 17:5-10

■ マタイ 18 章 8～11 「つまずくな」

創世記でアダムとエバが罪を犯したとき「手を伸ばした」と書かれています。そして取税人マタイがお金を集めていたとき、イエス様がマタイの前に来て「私についてきなさい。」と言われた場面でも「手を伸ばした」とあります。この二つの「手を伸ばした」は同じ意味の言葉であることを以前学びました。ということは、神さまは人の理不尽を通してその人に救いをもたらすのです。いったい人はどんなことでつまずくのでしょうか？それは普段その人が「欲していること」なのです。木の実があって、そこに罌が潜んでいたのです。アダムは罪を犯したとき「この女があつた木から取って私にくれたので食べたのです。」と言いました。でも、その実に手を伸ばしたのは、アダムです。残念なことですが、私たちは手を伸ばすから罌にかかるのです。イノシシが餌に釣られて罌にかかるように、私たちは普段から欲していること、思っていることにつまずくのです。遅かれ早かれ私たちは誘惑されているのです。だから、つまずかせるくらいなら、からだ全体がゲヘナに行くよりマシだから、その目を、その手を取った方がよい、そしてつまずきを起させることも忌まわしいことだと聖書は言っています。

この理不尽の社会の中にはいつもつまずきがあります。しかし私たちは、人々をつまずかせないということも考えなければいけません。人をつまずかせることは、石臼を首に結わえて海に投げ込んだ方がマシだというくらい重罪なのです。自分の生き方、考え方が人々をつまずかせ、イエス様が引き離してはいけません。そして、自分自身もつまずいてはいけません。

■ なぜつまずきが起こるのか。

マタイ 24 章 4 節「人に惑わされないように気をつけなさい」イエス様よりも人を見てしまうとつまずいてしまいます。私たちは人に何を言われてもそんなことはどうでもよいことです。神さまが私たち一人一人にくださった愛は、人に何かを言われたくらいで壊れてしまうものではありません。私たちははじめの愛から離れ、ずれてしまったからこのような状況になるのです。(マタイ 24 章 6～7 節) 神さまが悪いわけではありません。任されたのは私たちだからです。マタイ 24 章 10 節ではこのようなつまずきは避けられないが、最後まで耐え忍ぶ者は救われると言っています。では、なぜつまずくのでしょうか？ここで、「あなたは赦されたのか？」ということをご皆さんに投げかけたいのです。私たちは赦されたことがわからなくなっているからつまずくのです。神さまは「あなたは赦されたのだから、赦せ。」と言われていきます。しかし使徒たちはルカ 17 章 5 節で「そんなことを言われても赦せません。だから私たちの信仰を増し加えてください。」と言いました。それに対して主は、からし種ほどの信仰があればよい、と言われました。ここで言われているのは「赦されたことを思い出せ。」ということです。からし種ほどの小さな赦す力があれば、赦せないという大きな山に対しても奇跡が起こるのです。自分は赦されたという確信があれば赦せるのです。しかし私たちは行為を見てしまいます。私たちは赦されるために奉仕をしているわけではありません。今までの価値観に支配されているから私たちはこのことを勘違いしてしまいます。

自分の最初の悪を忘れ、今は、「してあげている」という目線になってしまいます。潜在的に赦されている確信を忘れてしまうから、赦されるために頑張ってしまうのです。私たちの奉仕は、神さまが赦してくださったことを感謝しているから、神さまの前に愛を表そうとしている表れなのです。過去を消し去るためにしているなら、それは奉仕ではなく償いです。人生は償いではなく、神さまへの喜びの恩返しです。

■ ある女の子とお父さんの話です。

お父さんは陶芸家からもらった器をととても大事にしていました。しかしあるとき女の子が誤ってそれを割ってしまいました。お父さんは心の中で「なんてことをしてくれたんだ!!!」と怒りを覚えました。女の子が「お父さん、本当にごめんなさい。」と真実に謝るので、「いいよ。わざとじゃないからね。」と言い赦しました。ところがその日から女の子は、なんとかお父さんに赦してもらおうとお年玉をためたお金を持ってきたり色々なことをしました。

神さまと私たちの関係もこのようになっていませんか？これはつまずきです。「赦された」と言っているのに赦されたかどうかわからない、「愛されている」と言っているのに愛されているかどうかわからない。

私たちは、赦されていない、愛されていない理由を手を伸ばして探しているのです。そこに罌が仕掛けられていて「私は赦されていない」「私は愛されていない」となってしまうのです。そうならないために、「私は愛されているんだ！逃げない！必ず神さまがよくしてくださる！」と信じて耐え忍ぶのです。ダビデもどんなときにも「主がよくしてくださったことを何一つ忘れるな。」と自分に言い聞かせて山に向かって目を上げたのです。「これだけしてあげたのに。」と思っている人はつまずきます。この言葉は私たちを誘惑してきます。2000 年前にイエスキリストが私たちのために犠牲になってくれたことを忘れて、彼を呪うようになっては行けません。

■ エドウィン・ヘンリー・ランドシアの話

あるお金持ちの婦人が古いお城を買って、修復が終わり完成のパーティーを開きました。招かれた人たちの中にランドシアもいました。パーティーで一人の女中がワインをこぼし、きれいに修復されたばかりの漆喰のかべにワインがかかり汚してしまいました。女中は謝り、その場から去りました。次の日、パーティーに招かれた人たちは城の郊外へ散策に出かけましたが、ランドシアは城に残りワインで汚れた壁に絵を描きました。散策から帰ってきた主人はその壁画を見て、女中に、「あなたがワインをこぼしてしまったおかげで、こんなに素晴らしい絵を描いてもらえました。ありがとうございます。」言ったのです。神さまがなさることは、この話のように私たちにはよくわからないのです。

この女中は、ワインをこぼしてしまったことで、もう辞めようと思ったはずでした。ところが次の日、ワインをこぼしてしまったことが、人々の前で面目を保つどころか主人に感謝されるような事態になりました。

■ 目の見えない人の出来事を通して

盲人がイエス様のところに連れてこられた記事があります。そこでイエスキリストはこうに言われました。「見えないのは、彼が罪を犯したからでもなく、彼の両親が罪を犯したからでもない。神の栄光があらわれるためだ。」神さまは、私たちが諦めなければ、つまずかなければ、その出来事を益と変えることができるということを知らなければなりません。なぜなら神さまは私たちの過去の全ての罪を赦すことができるからです。

この盲人と両親は本当に罪を犯していなかったのでしょうか？違います。私たちは、もともと罪とその代償を受けているのです。イエスキリストは赦したからそう言えたのです。赦すどころか、それを解決する力も持っていたからです。だから神さまは、その時の出来事に目を向けるのではなく、その後のことを見て「神の栄光があらわれるのだ。」と言ったのです。アダムとエバの罪は、神の栄光となって、今日、私たちに与えられています。

さいごに

マタイ 5 章 3 節「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人」マタイ 18 章 8～11 「つまずくな」のものだからです。あなたはなぜここにいますか？あなたは神さまと一緒にいる理由がわからなくなっていますか？思い返してください。

「主がよくしてくださったことを何一つ忘れるな。」とダビデは命がけでこのことを私たちに残してくれました。「神へのいけにえは砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたはそれをさげすまれません (詩篇 51:17)」

誰かに何をされようが、何を言われようが、神は私たちを愛し赦したのです。それを忘れてはいけません。

(要約者:秋山 恭子)

(2024年2月25日)